シリーズ

発達に違いのある子どもたち

発達に違いがある子どものコミュニケーションを理解する（前編）

まいすてっぷには、さまざまなコミュニケーション特性を持った子ども達がやって来ます。子ども達は真面目に毎日を過ごしているのですが、発達の違いから、日常のやり取りの中で交わされることばの意味を取り違えたり、周囲で起こるできごとの解釈を取り違えたまま、誰にも気づいてもらえず過ごしている子ども達がいます。

数年前、まいすてっぷに来始めたばかりの小学4年生のA君が「クラスで友達に意地悪なことをする人が許せず、それを見るたびに先生に報告し、叱ってもらっていたら、自分が意地悪をされるようになった。その理由がわからない」と話してくれました。なぜ先生に報告したのかを聞くと「先生が〝みんな友達、みんな仲良し〟と言うので、みんなが友達で仲良くするためには、意地悪は先生に言ってやめさせなければいけないと思っていた」という事でした。

このエピソードに、何らおかしな所はないように思えるでしょう。「みんな友達、みんな仲良し」は当たり前だろう、と思う人が大半だと思います。しかし実際の人間関係を考えると、同じクラスだからといって、全員が同等な友達ということは、あまりないのではないでしょうか。大人になり、かつて同じクラスだった人の事を、全員「友達」と言えるのかどうか考えてみてください。ある人は「親友」であり、ある人は普通の「友達」、ある人は「ただのクラスメイト」、中には「いっちょんすかんやった」人もいたでしょう。私たちはそれなりに、その人との親密さや関係性をもとに、人と距離を作っているのだと思います。先生が言う「みんな友達」は、そのような人間関係の総称なのだと言えます。

A君は「自閉症」の特性を持ち、その脳機能の違いから、自分だけの力では習得しにくいことがありました。ことばが示す事柄には、目に見えない「暗黙の了解」があること、そして周囲の「定型発達」の人達は、それを自然に察知し、うまく切り替えていることなど、あえて学習しなければ知り得なかったと思います。

まいすてっぷでは、子どもと日常の色々なできごとの話をしながら、その状況を書き出して視覚化し、周囲の人との関係や人の考え方、人の感情の学習をしています。A君とは、まずは「自閉症」の脳機能の特性について学習し、定型発達の人との見え方や感じ方の違いを知りました。そして「友達」には色々な種類があり、とても仲が良く何でも話せる「親友」、小さい頃から仲の良い「幼なじみ」、よく一緒に遊ぶ「友達」、同じクラスの「クラスメイト」など、辞書などで確認をしながら「友達」についての理解を深め、A君なりの、クラスの一人一人との関係性を確認しました。同じクラスの人全員と絶対に友達、絶対に仲良しでなくてもいいんだと伝えると「えー、そうなの？」と驚いていたのを思い出します。

もともと理解力の高いA君は、その後さまざまな「違い」について学習し、たくさんのソーシャルスキルを身につけました。それから数年経った今、彼自身も、まいすてっぷに通い始めた頃の自分を懐かしく思うようです。

人との関係性といえば、家族との関係についても誤解をしていた男の子がいました。時々、一家のお母さんのことを、「ママ」とか「お母さん」と呼ばずに、○○ちゃんと下の名前で呼ぶご家庭がありますが、小学2年生のB君の家庭でも、お母さんのことを家族みんなが「ゆうちゃん」と呼ぶので、B君も同じように「ゆうちゃん」と呼んでいました。まいすてっぷで、B君の家族関係の図を作成していた時「お母さんはどの人？」と聞くと「いない」と答えます。「今日一緒に来た人（明らかにお母さんです）はだれ？」と聞くと「ゆうちゃん」、「ゆうちゃんはお母さんじゃないの」と聞くと「うん」と言います。B君は、「ゆうちゃん」と「お母さん」が同じ人を示すことに気づいていませんでした。「お母さん」は、よその家庭にいる「お母さん」と呼ばれる人達のことを示すのだと解釈していたようです。それから「お母さん」のことばの意味を学習し「ゆうちゃん」が自分の「お母さん」であることを理解することができました。

これらは一般的に見れば不思議な解釈ですが、そもそも物事の捉え方が生まれつき違う彼らからすれば、当たり前の解釈なのです。次回もまいすてっぷで起こる、愛すべき彼らのさまざまなエピソードについてお伝えしたいと思います。

＜文書寄贈＞
ＮＰＯ法人こころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてっぷ」